

スポーツ漫画がスポーツ選手に与える影響

—バスケットボール選手に着目して—

スポーツマネジメントゼミナール 1314005 岩井 可愛

1. 研究動機・研究目的

日本は世界でも有数の娯楽大国である。その日本娯楽産業の中でも中心であるといわれるのが漫画である。漫画は有史以来日本で独自に発展した文化であり、日本が海外に輸出し、国内外で共に若者を中心に人気を集め、注目され続けている文化である。また、現代の漫画は、漫画という括りの中にも様々な方向性や対象者の漫画が揃ったことで年齢・性別を問わず広く受け入れられ、人々に少なからず影響を与えている。このように発展している漫画文化の中で、スポーツ漫画も様々な競技を取り上げ、種類や中身が専門的で充実性のある作品が増えてきているが、その中で、スポーツ漫画が学生スポーツ選手に与えている影響については、あまり明らかにはなっていない。

本研究は、日本におけるスポーツ漫画作品の変遷や文化を明らかにした上で、学生の競技人口が多く、スポーツ漫画の題材としても多くの作品が取り扱われているバスケットボール競技に着目し、研究を行うこととした。研究目的は、1) バスケットボールを題材としたスポーツ漫画と他競技を題材としたスポーツ漫画を比較し、バスケットボール選手に与えるスポーツ漫画の影響を検証すること、2) スポーツ漫画における個人的属性の違いの関係を検証すること、3) 海外のスポーツ漫画の影響の有無を検証することの3点とした。また本研究の最終目標として、今後日本におけるスポーツ漫画がスポーツ選手にとってより一層影響力をもたらすものに発展していくための道筋を見出すことを研究目的に加えて、研究に着手した。

2. 研究方法

- 1) 調査対象者：学生時代に部活動でバスケットボール競技を経験したことのある
スポーツ系の学部の大学生及び非スポーツ系の学部の大学生（105名）
- 2) 調査方法：インターネット上で回答できるオンラインアンケート調査
- 3) 調査期間：2017年10月24日から11月7日の15日間
- 4) 調査項目：(1) 個人属性 (2) 一般漫画及びスポーツ漫画との関わり
(3) バスケットボール以外の競技を題材にしたスポーツ漫画との関わり
(4) バスケットボールを題材にしたスポーツ漫画との関わり

3. 主な結果と考察

バスケットボール選手にとってスポーツ漫画及びバスケットボール漫画は、一般漫画と同様に娯楽を目的として閲覧する者が大多数であったが、技術面や精神面を養う目的で漫画を閲覧する者も多い傾向にあった。個人属性や他競技漫画を閲覧した経験が、選手のバスケットボール競技に大きな影響を与える傾向は少ないが、全く影響を及ぼさないという訳

ではなく、精神面では少なからず影響があることが明らかになった。競技は異なっていたとしても、同じスポーツという類において、精神面では共通する部分があるのだと考察できる。またバスケットボールを題材にしたスポーツ漫画に関しても、戦術や専門的な知識の取得などの技術面を競技に活かす意見も多くあがったが、技術面以上にモチベーションの保ち方などの精神面や、人間関係や組織づくりなど団体球技系ならではの特殊性を競技に活かす選手の割合が多い結果であった。

また海外のスポーツ漫画の影響の有無についての研究は、海外のスポーツ漫画及びバスケットボール漫画を閲覧したことがある選手が、本研究の調査対象者の中からは誰一人得られなかったという結果から、海外の漫画は今現在日本には浸透していると言い難く、影響は及ぼさないと考察できた。漫画自体が日本独自で発展した文化であり、日本が海外に輸出し、海外で日本の作品が人気になる傾向が強い現状があることが要因と考えられる。

4. 結論

スポーツ漫画及びバスケットボール漫画は、選手にとって技術面や精神面で大きく影響をもたらしている。この結果から漫画はスポーツ選手にとって、大きな影響をもたらす得る十分な材料であり、今後も発展を続けることで、益々の成果が期待できる。

5. 今後の課題

日本において、漫画の文化は既に十分に根付いているが、スポーツ漫画の開拓には余地があり、今後も益々の発展が期待できる。本研究では、今後日本におけるスポーツ漫画がスポーツ選手にとってより一層影響力をもたらすものに発展していくための道筋を見出すため、今後のスポーツ漫画の作品の方向性として、1) 既存のスポーツ漫画より一層専門性のある内容のスポーツ漫画、2) 多種多様な競技、ターゲット層が拡大された幅広いスポーツ漫画、3) スポーツ選手以外へも影響を及ぼす内容のスポーツ漫画の3種類を提案した。加えて本研究の研究結果に基づき、スポーツ漫画普及後の継続的な活動についての示唆を行い、スポーツ漫画の明るい発展の未来が期待できることを示した。

また今回の研究では、主にバスケットボール競技を対象に調査を進めたため、今後は多様な競技を題材にすることで、更なる発展が期待できると考えられる。

6. 卒業論文の執筆を終えて

大学生活の集大成として、自身にとって身近であり、好みであるバスケットボール競技を題材に用いて論文に打ち込むことができたことは充実しており、幸せなことであると感じました。また研究を終え、より一層の愛着心の芽生えも感じることができました。卒業論文の執筆は自身にとって大きな財産となり、ました。今後は培った多くの収穫や学びを活かし、立派な社会人となれるよう精進していきたくと思います。

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご助力を頂きました。懇切丁寧にご指導頂きました小笠原悦子教授や大学院生の方々をはじめ、共に切磋琢磨し合い、達成感を分かち合ったスポーツマネジメントゼミナールの仲間の皆様、快く調査を引き受け、御協力して頂きました105名の大学生の皆様へこの場をお借りし、心より感謝の気持ちとお礼を申し上げます。